

話 題

再会の思い

問 寧

2007年トルコ総選挙直後の現地調査でイスタンブル近郊の農村を訪れたことがある。午後の訪問先との約束にはまだ時間があったため、宿泊先のすぐ近くにある小さな村に足を踏み入れたところすぐに2人の少年、メフメットとハサンに出会った。彼らは小学生で、昼に礼拝へ行くまでの間、村の中を案内してくれた。村の中心にあるモスク、その年に建てられた公民館、そして小学校と巡る間にも止めどもなく私にあれこれと説明してくれた。小学校は投票所として使われ、与党が8割を得票した開票結果も張り出されていた。彼らに案内されたので、「堂々と」入り込んで選挙結果を書き写した(そもそも不正を働いているわけではないのだが……)。彼らはやがて4年生になると、3キロメートル先のより大きな村の小学校で英語を習い始めるのだと語調を強めた。最後に記念撮影をしようとしたが、デジカメの電池が切れていた。するとメフメットは自宅にあるデジカメのバッテリーを貸してくれるという。有り難かったがそこまで世話になるのは気が引けたため遠慮申し上げ、再度深い感謝を述べて彼らと別れた。

翌年の追跡調査でも同じ場所に宿泊したため、調査の帰りに例の村を尋ねてみた。また村の入り口である2人の少年と再会するのではとの期待を込めた予感を持っていた。予感は半分的中した。村の入り口の脇の坂道に、メフメットが座っていたのである。しかも同年代のかわいい女の子とともに、青リンゴを食べながら。私は思わず近寄ろうとしたが、彼はその場所から動かず片手を挙げて「よう」という仕草をただけだった。挨拶の言葉を交わしたが、長居をしないほうが良い感じがしてその場を立ち去った。さらに歩いていくと、ハサンにも出会った。彼も、笑顔で接してくれたものの、驚きのような表情は無かった。彼はその年、工場で働き始めたという。ルーマニア出身の同僚とともに帰宅する途中だった。成功を祈って、彼らと別れた。

少しは感動的になるはずだった彼らとの「再会」が、あっさりと終わったことを自分なりに解釈した。メフメットはガールフレンドとの貴重な時間を過ごしていたのだろう。ハサンも自分の自由になる時間が少なくなり、余計な立ち話をする余裕は無かったのだろう。しかし、それより大きな理由は、私がすでに珍しい存在ではなくなっていたことだ。私は日本から半日以上かけトルコ、中でもよりによってこの村にたどり着いたのだが、彼らにしてみれば前年と同じ外国人が同じ場所に現れたのはたいして不思議なことでは無い。「再会」の思いが一方的だったことに気がついた。

(はざま やすし / 地域研究センター)